

第10講座 古文

1 次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

*4 今いまは昔むかし、木きこりのこ、山やま守まもりりにに斧きねををととらられれてて、わわびびしし、心こころううししとと思おもひひてて、
つらづ頼た杖づつつききててををりりけけるる。山やま守まもりり見みてて、「ささるるべべききここととをを申まをせせ。ととららせせむむ。」と
 いいひひけけれればば、

ああししききだだににななききははわわりりななきき世よ間なかにによよききををととらられれててわわれれいいかかににせせん
 とと詠よみみたたりりけけれればば、山やま守まもりり、返かへししせせむむとと思おもひひてて、「うううううう」ととううめめききけけれれ
 どど、ええせせざざりりけけりり。ささてて、斧きね返かへししととららせせててけけれればば、ううれれししとと思おもひひけけりりとと
 ぞぞ。ひひととははたただだ、歌うたををかかままへへてて詠よむむべべししとと見みええたたりり。

(『宇治拾遺物語』)

- * 1 山守 〓 山の番人。 * 2 斧 〓 手おの。 * 3 心うし 〓 情けない。
- * 4 頼杖 〓 ほおづえ。 * 5 さるべき 〓 (この場に) ふさわしい。
- * 6 くだに 〓 〓 でさえ。 * 7 わりなき 〓 何かと困る。
- * 8 返しせむ 〓 返歌しよう。 * 9 えせざりけり 〓 できなかった。

問一 ——— 線① 「をりける」、④ 「いひければ」、⑦ 「かまへて」をそれぞれ現代かなづかいに直しなさい。

① _____

④ _____

⑦ _____

問二 ——— 線② 「山守見て」とありますが、「山守」は何を見たのですか。

最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 木こりがくやしがつている様子

イ 木こりがさめざめと泣いている様子

ウ 木こりが何かを言おうとしている様子

エ 木こりが困り果てている様子

問三 ——— 線③ 「とらせむ」とありますが、何を「とらせむ」と言っているのですか。古文中から書き抜きなさい。

問四 ——— 線⑤ 「よき」という言葉には何と何の意味がかけられていますか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア よいものと、おの イ よいものと、山の番人
- ウ おのと、山の番人 エ 木こりと、おの

問五 ——— 線⑥ 「斧返しとらせてければ」とありますが、なぜ山守は斧を返すことにしたのですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア 木こりが仕事をしなくなったから。
- イ 木こりが筋の通ったことを言ったから。
- ウ 木こりがすばらしい歌を詠んだから。
- エ 木こりが堂々と文句を言ったから。

問六 教訓が述べられている一文を古文中から探し、その初めの五字を書き抜きなさい。

2 次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

今は昔、池の辺に蛙の数多集りて言ふやう、「(中略) いかにもして人の如く立て行くならば良かるべし。いざや観音に願を掛けて立事を祈らむ」とて観音堂に参りて、「願はくは我等を憐み給ひ、せめて蛙の身なりとも□の如くに立て行く様に守らせ給へ」と祈りける。誠の心ざしを哀れと思召しけん、その儘後の足にて立上りけり。所願成就したりと喜びて池に帰り、「さらば連立ちて歩いて見ん」とて陸に立並び、後足にて立て行けば、目が後になりて一足も向へ行かれず。先も見えねば危さはかりなし。「これにては何の用にも立たず。只本の如く這はせて給はれ」と祈り直し侍べりと言へり。(浅井了意『浮世物語』)

*1 憐み給ひ⇨お哀れみになつて。

*2 思召しけん⇨(観音様が)お思いになつたのであろうか。

*3 所願⇨願ひ。

*4 危さ言ふはかりなし⇨言いようがないほど危なつかしい。

問一 □にあてはまる言葉として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 蛙 イ 犬

ウ 人 エ 牛

問二 線①「心ざし」の内容として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 立って歩けるようになりたい。

イ お金持ちになりたい。

ウ 這って歩けるようになりたい。

エ できるだけ強くなりたい。

問三 線②「向」とはどの方向ですか。最も適当なものを次のうち

から選び、記号で答えなさい。

ア 体の前側 イ 体の後ろ側

ウ 体の右側 エ 体の左側

問四 線③「何の用にも立たず」とありますが、どんなことが何の

役にも立たないのですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 蛙として生きること

イ 目が見えること

ウ 後ろ足で立って歩けること

エ 観音様に祈ること

問五 蛙が立って歩けなかったのはなぜですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 立ち上がるとくらくらして、目の前が真っ暗になるから。

イ 立ち上がると見える景色が一変し、恐ろしいから。

ウ 立ち上がると目が後ろになり、前が見えないから。

エ 立ち上がると足もとがふらついて、危なつかしいから。

問六 この話の蛙を評した言葉として最も適当なものを次のうちから選

び、記号で答えなさい。

ア 命知らず

イ 付和雷同

ウ 三日坊主

エ ないものねだり

練習問題

1 次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

町人も学問はなくてはかなはざるものなり。さりながら、学問のいたしやうにて、身の徳ともなり、また、損ともなるべし。その手筋よく学びぬれば、すこし学びてもその益大きなり。悪しく学びぬれば、少しく学びぬるは少しき害となり、広く学びては□となるべし。若き人などの、一年二年学びぬれば、稽古修行のためとて、友人を集め、見台にむかひて聖経を講談す。或は輪講などと号して、たがひに講談して弁舌を習はす。これみな学問をもつて一芸となして、弁舌をもつて人に高ぶらんとするものなり。もともと、学問は音曲の芸者のごとく、弁舌音声によるべきものにあらず。道理をきはむる事明らかならば、弁舌を習はすことなくとも、何ぞ聖経の理を弁ずるに難からんや。ただ口釈をし習ひて、物読儒者となりて渡世の便とせんと思ふ人は格別なり。町人の子に生まれて、町人の家職をいやしみいとひ、父母の家を出て一向仕官俸祿の望みありての学問ならば、その主意すでに道理にたがへり。学問の本意にはあらず。一人の風俗万人にうつるものなれば、いっとなく世上の学問の風俗悪しくなりゆきて、学問かへつて身の害となれる類多し。この故に初学の志の立てやう肝要なることなり。(西川如見『町人囊』)

*1 見台 座つて書物を見る時に、書物をのせる台。
 *2 聖経 聖人の述作した書物。聖人の言行の記録。
 *3 口釈 講釈。書物の語句や文章の意義の説明をすること。
 *4 仕官俸祿 武士になること。

問一 — 線①「学問のいたしやうにて、身の徳ともなり、また、損ともなるべし」とありますが、損となるような悪い学問のしかたの例

を挙げているひと続きの二文を古文中から探し、その初めと終わりの四字を書き抜きなさい。

--	--

問二 □にあてはまる言葉として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア 大きな益 イ 少しき益
 ウ より少しき害 エ 大きな害

問三 — 線②「弁舌をもつて人に高ぶらんとする」とは、どうするこ

- とですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。
 ア 弁論の技術を徹底的に修得しようとする事
 イ 弁論によって人に興味を持たせようとする事
 ウ 弁論の巧みさを人に誇ろうとすること
 エ 弁論の巧みな人を軽んじようとする事

問四 — 線③「学問の本意にはあらず」とありますが、筆者は、学問の本来の目的は何だと言っていますか。古文中から八字で書き抜きなさい。

--

問五 この古文中で述べられていることとして最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア 町人の家の子が武士になろうとする志のすばらしさ
 イ 初めて学問をしようとする時の志の立て方の大切さ
 ウ 学問を積極的に学ぶことの大切さ
 エ 学問の本質的な目標を立てることの難しさ

2

次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

千代女は加賀の松任の人にて、幼きより風流の志ありて、俳諧をたしなむ。しかれども、その師を得ず。これかれ行脚の人に問ふに、美濃の廬元坊を称することみな同じ。ここに於て、ことさらに行きて学ばんと

思へるに、折しも、行脚して来りしかば、その旅宿に着いて相見を請ひ、

志を述ぶ。元坊、草臥れたりとて寝てありしところへ行きて、教へを求むるに、さらば一句せよ、と言ふ。夏のころなれば、時鳥を題とす。や

がて句を吐きたるに、元そのただ者ならざる気韻を見て、その句を肯はず、これは誰もすべきところなりと言ふ。さらばとて、また一句を吐く。

なほ肯はざること初めのごとし。元は既に眠りにつけども、女はなほ去らず、沈吟す。その眼のさめたるをうかがひては、また一句を問ふ。か

くて、数句に及び、つひに暁天に至る時、元起きて、終夜去らざりしや、

夜は明けたりや、とおどろく。時に千代女、

ほととぎす郭公とて明けにけり

と言へるを大いに賞し、これなりこれなり、汝他日この意地を忘るることなくば、名、天下にふるはんと、師弟の約をなせり。はたして、女流にめづらしきこの道の高名に至れり。これは、まだ少女の時なりけらし。

(三熊思孝『続近世畸人伝』)

* 1 行脚の人 || 国々をめぐる修行僧。 * 2 相見 || 面会すること。

* 3 元 || 廬元坊。 * 4 気韻 || 気品のある感じ。

* 5 肯はず || 承諾しない。 * 6 沈吟す || 深く考えこむ。

問一 ———— 線① 「美濃の廬元坊を称する」とは、どういうことですか。

最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 美濃の廬元坊を賞賛し、俳諧の師として薦めたということ

イ 美濃の廬元坊に教わったことを自慢したこと

ウ 美濃の廬元坊を名乗り、俳諧の師になろうとしたということ

エ 教えを乞うため美濃の廬元坊をさがし回っていたということ

問二 ———— 線② 「行脚して来りしかば」、③ 「志を述ぶ」は、それぞれだ

れの行為ですか。古文中から書き抜きなさい。

② _____ ③ _____

問三 ———— 線④ 「その句を肯はず」とありますが、廬元坊が千代女の詠

んだ句を認めなかったのはなぜですか。最も適当なものを次のうち

から選び、記号で答えなさい。

ア 千代女の普通でない様子を見て、早く追い返してしまおうと思

ったから。

イ 千代女の句のつまらなさに失望して、早いうちにあきらめさせ

ようと思ったから。

ウ 千代女の才能を見抜いて、よりレベルの高い句を詠ませようと

思ったから。

エ 千代女の豊かな才能をねたみ、自信をなくさせようと思ったか

ら。

問四 ———— 線⑤ 「この意地」とはどんな意地ですか。最も適当なものを

次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 世間に名が聞こえるまで句作に励もうとする意地

イ 一晚中、認められるまで句を詠んだ意地

ウ 数多くの句を一晚で作ってみせようとする意地

エ 廬元坊が起きるまで帰るまいとした意地